

止いの、本当にあつてはな  
らぬこと。しかし、  
それは別に休日がカレン  
スマズプレゼントはもらえ  
ないのは、本当にあつてはな  
私自身も接客業ですから基  
本は平日が休みです。クリ  
もちもまた、尊ぶべきもの  
もたちのために働く親の気  
持ちはまた、尊ぶべきもの  
だと思ひます。  
表情で写真が撮れました。  
写真を見ながら「昼寝  
ような感情表現を1歳くら  
の時にしつこく出ません  
いのできるなんて、これま  
景ではありませんか。この  
れて、「母の目」のプレゼ  
ントをもらった思いがしま



764

# 石牟礼道子の世界観、音楽に

## 佐藤 岳晶氏

6月12日に金剛能楽堂で、作家の石牟礼道子さん(1927~2018年)が原作を手掛け、細織の人間国宝・志村ふくみさんが衣装を監修した創作能「沖宮」の上演がある。上演に先立ち、会場では石牟礼さんの詩に私が作曲を試みた歌曲『黒髪』



さとう・たけあき 1975年生まれ。作曲・音楽理論、邦楽演奏。東西の音楽を比較・研究。QRは熊本日日新聞社のサイトで、天草での佐藤さんの演奏場面。

と『アニメマの鳥』が演奏される。石牟礼さんを師と仰ぐ私は、晩年に熊本の療養先を度々訪ねた。板三味線の音色には、郷里の記憶が深く刻まれているという。楽器を持参すると、さっそく爪弾かれた。病を忘れたかのような生き生きとした面持ちが、今でも忘れ難い。御手に触れた楽器を今春、舞台上で演奏した。本体全て木製のシンプルな構造だ。演奏の表現は、木そのもの

のをどう鳴らすか、木との共振に身を浸す中での試行錯誤だった。天草四郎が執り行うミサの聖歌として作詩された『アニメマの鳥』。今回の演奏では、南蛮文化の展示施設・天草コレジヨ館(熊本県天草市)が所蔵し、竹製パイプであつたオルガンの音を取り入れる。およそ400年前に天草で作られていたといい、古楽器製作家の平山照秋さんが復元した。

能管や尺八にも通じる竹の響きが生かされ、独特の和洋融合の調べは天草のキリシタン世界を映し出すにふさわしい。能楽堂に楽器を運び込めないため、事前に天草で演奏を録音し、録音技師・池田和生さんの卓越した技術で天草と京都を結ぶ。先頃、池田さんと天草での録音に出かけた。いざ録音演奏を始めるのが難しい。心引かれる柔らかな美しい音色だが、室温の変動や人の手でふいごから送り込む風とのデリケートな相互作用で、竹の響きは一回一回異なる表情をみせる。全てこちらの

をどう鳴らすか、木との共振に身を浸す中での試行錯誤だった。天草四郎が執り行うミサの聖歌として作詩された『アニメマの鳥』。今回の演奏では、南蛮文化の展示施設・天草コレジヨ館(熊本県天草市)が所蔵し、竹製パイプであつたオルガンの音を取り入れる。およそ400年前に天草で作られていたといい、古楽器製作家の平山照秋さんが復元した。

思うようにはコントロールし難い。竹の鳴りに応じ、演奏ニユアンズを調整していき。もどかしさはいつか発想転換に至った。私は、竹に祈るような心持ちとなっていた。石牟礼さんの教えが聞こえるようだ。著書に次の一節がある。「人間はもつと、規定することの出来ない存在や森羅万象に、おそれを持ってよいのではないか」。竹に一心に身を委ねて紡ぐ一期一会の音楽。また一つ、音楽の学びを頂いた。世界は私たちの「アンダーコントロール」下にあるとは考えず、逆に私たちが万物からの働きかけに心を開き、受け入れていく中で得られる豊かさを考えてみたい。自らのコントロールを超えたものとともに、あるべき世界、美を思い描く。例えば京の庭がそうだ。そのような心から作られる音楽とは、どんなものであろうか? 石牟礼さんの深き言葉に導かれ、私は木に、竹に、森羅万象に尋ね続けていきたい。(作曲家、京都女子大准教授)